

筒美京平全曲研究・全曲解説

高護

夏のクラクション HORNS IN THE SUMMER

シティ・ポップスは音楽的には基礎にAORがあり、サウンド面でフュージョンやブラック・コンテンポラリー(ブラコン)の要素が加えられている。シティ・ポップスもAORも和製英語だが、AORはアダルト・オリエンテッド・ロック=大人向けの洗練されたロックの略で、聴き心地はソフトだが構造的にはビートを主要素とするロックである。ヘヴィ・メタルやパンクのような騒々しさは無いが、あくまでもビートから作られる音楽でメロディーはビートやコードと一体化されている。そこにフュージョンの特徴ともいべきテンション・コードやブラコンの16ビートが装飾されている。



つまりシティ・ポップスはそれ以前の歌謡曲やフォーク系ニューミュージックとは異なるルーツを持つ新しい音楽であり、従来の作詞の技法では対応しきれない部分がある。ひとつはビートとメロディーの関係におけるロック的な符割りや歌唱が必要不可欠であることと、もうひとつは16ビートを伴うテンション・コードによるサウンドの響き(音響)と言葉の関係である。テンション・コードは響きが複雑で奥が深い、シンプルさには欠けるので言葉をストレートに伝えづらいという欠点がある。

シティ・ポップスはカヴァー・ポップスやグループ・サウンズ、ニューミュージックと同様に日本固有の音楽ジャンルだが、中心となったのは編曲およびサウンド面における大村雅朗、井上鑑、林哲司らで大村雅朗と林哲司はヤマハ音楽振興会の出身である。70年代中盤～後半におけるヤマハ出身の萩田光雄と船山基紀の活躍はいうまでもないが、80年代には続く林哲司と大村雅朗が時代を牽引することになる。また井上鑑、林哲司とそれ以前の編曲家との決定的な差異は二人とも作詞・作曲・編曲を自身が手がける自作自演者であるところ、つまりシンガー・ソングライターであるという点である。これはきわめて重要な要素である。

シティ・ポップスの成立要因として、メロディー、ビート、リズム、アンサンブル、オーケストレーションといった「サウンド」と同等かそれ以上に重要な要素が言葉、すなわち「歌詞」である。

新たなサウンドに対応した言葉の響きやリズムが「歌詞」に求められていたし、いかにスムーズに聞こえるか=洋楽的な聞き心地はこの時代のひとつのテーマでもあった。

シティ・ポップスの直接の源流となったAORとしては70年代後半に登場したビリー・ジョエル、ボビー・コールドウェル、ボズ・スキャッグスといった白人のソロ・シンガーと、その後を受けて登場したクリストファー・クロスの存在が大きい。特に「セイリング」や「ニューヨーク・シティ・セレナーデ」で示されたクリストファー・クロスのハイ・トーンかつ透明感のあるヴォーカルの新鮮な響きは大きな支持を受けて大ヒットした。



「夏のクラクション」は「ドラマティック・レイン」「エスケイプ」に続いて筒美京平が稲垣潤一に提供したシングル三部作の3作目の作品である。オリジナル・アルバムには未収録で純粋にシングルとして制作されている。正式には「HORNS IN THE SUMMER」という英語のサブ・タイトルがクレジットされている。

大ヒットした「ドラマティック・レイン」は82年10月リリースでチャートの8位を獲得。作詞家・秋元康の初ヒット作として記憶される。チャートのピークは翌83年1月で、続く3月リリースの「エスケイプ」はチャート・アクションがやや鈍く挽回のための勝負作ともいえる。

「ドラマティック・レイン」の編曲は船山基紀だが、「エスケイプ」で井上鑑が起用されて、「夏のクラクション」も続投となる。これは82年秋から船山基紀が、フェアライトCMI等の新たな機器類による本格的なコンピュータ・ミュージックの技術習得のために約1年間、渡米してL.A.に滞在していたことが直接の理由と考えられる。

井上鑑はAOR歌謡史上最大のヒットである寺尾聰の「ルビーの指環」(81年)で頭角を現し、アルバム『REFLECTIONS』でレコード大賞編曲賞を受賞している。大滝詠一の重要作のひとつ『NIAGARA SONG BOOK』(82年6月)では全曲の編曲を担ったナイアガラ直系の音楽家の筆頭ともいえる存在である。シリア・ポールのアルバム『夢で逢えたら』(77年6月)に全面参加したのをはじめ、『A LONG VACATION』はもちろん、90年代以降に2作だけリリースされたシングル「幸せな結末」「恋するふたり」で編曲を担っていることから、大滝詠一の井上鑑に対する信頼度の高さがわかる。

稲垣潤一の1～2枚目のアルバム『246:3AM』『SHYLIGHTS』の「ドラマティック・レイン」を除くすべての編曲を井上鑑が担当しているが、これは大滝詠一のビジネス・パートナーであり、『A LONG VACATION』の影の立役者ともいべき朝妻一郎の率いるP.M.P(現在のフジバシフィック音楽出版)が稲垣潤一の原盤制作をしていたことから、アレンジャーとして井上鑑が起用されたと思われる。

井上鑑の筒美京平との初作品は79年7月の桑名晴子「Keyはふたりで」で、リリースのアルバム『マジェンダ』、浅野ゆう子「ストップ・ザ・カンパセーション」、清野由美「恋は誘惑」と続いた。「ルビーの指環」のヒットから少し経過した83年の早見優の3rdアルバム『ラナイ』に筒美京平が提供した4曲すべてを井上鑑が担

当っていて、これが時期的には「エスケイプ」と「夏のクラクション」の間で制作されていることが大きなヒントになる。

「夏のクラクション」はイントロの冒頭の2音=1/2小節のまろやかで芯のある響きに耳を奪われる。コードはB♭7/E→A♭M7で音符としてはラ♭→シ♭という単純な動きだが、ボイスンギング=音の積み方がそれ以前の筒美京平には登場しなかった造りである。派手さはないが、これぞ「シティ・ポップス」ともいべき斬新なサウンドである。既成の生楽器で創出される音にはない異質な色だが、一般に想像されるシンセサイザーのエッジの効いた音ともまったく異なる心地のよいサウンドである。アナログ・シンセのオーバーハイムOB-Xaの音色のように思われるが特定はできない。

その余韻のままイントロが4小節+1/2で構成はイントロ→A→B→Cの2ハーフ。A=8小節～B=4.5小節～C=9小節～ブリッジ4.5小節の26小節が1楽節となる。イントロとブリッジとエンディングはすべて同じでエンディングは余韻を残したlitで終わる。楽器はコード弾きのシンセと抑制されたドラムスとボトムの効いたエレキ・ベースのみのシンプルな演奏だがきわめて印象的なフレーズである。音像として奥の方でかすかに聴こえるmwwoo～というコーラスはかなり凝ったミキシングだが、Emulatorの可能性もある。ミキシングは左右に広がるステレオ感だけではなく、奥行きのある立体的なサウンドがユニークで、新たな時代の音を体現している。レコーディング・エンジニアは稲垣潤一のオリジナル・アルバム『246:3AM』『SHYLIGHTS』『J.I.』『Personally』のすべてを手がけた東芝スタジオの村田研治で、かなりコンセプチュアルな音作りである。

イントロ=ブリッジの部分はリフとしての機能も高く、このパート=シークエンスがこの楽曲のサウンドの要のひとつともいべき箇所である。後のHIPHOP的な着想で捉えればこのパートをサンプリングしてループすると1曲のトラックとして使える、というようなシンプルかつキャッチーな優れたフレーズである。



シンセサンダーはイントロ=ブリッジのみで歌のある部分には入らない。シングル盤にクレジットはないが、シンセ・プログラムは4人目のYMOとして知られる松武秀樹。松武秀樹は自身のユニットLOGIC SYSTEMで前年82年に筒美京平作曲の「哀愁のオリエント急行(Orient Express)」をシングル・

リリースしている。

ハネの効いたタイトな演奏を展開する楽器の編成はシンプルでドラムス、エレキ・ベース、エレキ・ギター、ピアノの4リズムが基本で途中で部分的にグロツケンが参加。ストリングスもブラスもパーカッションも一切登場しない、派手なソロもなくシンプルだが歌に寄り添う絶妙な温度感である。

「夏のクラクション」にはミュージシャン、エンジニア等のPersonnelクレジットがないが、アルバム『J.I.』のトータル・クレジットに記載されたミュージシャンは下記になる。

ドラムス:山木秀夫

ベース:高水健司

キーボード:井上鑑

エレキ・ギター:今剛。

歌部分の4リズムとブリッジのリフとのコンビネーションは独創的かつ斬新で、それ以前のどこにも存在しなかったまさに新たな音楽のデザインである。

井上鑑の著書『僕の音、僕の庭』(2011年筑摩書房刊)の第1章に筒美京平との稲垣潤一における仕事について下記の記述がある。筒美京平の音楽の制作

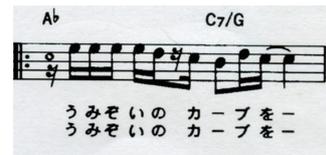
に直接関わった音楽家の優れた分析であり、的確な理解である。

「一拍の短い休みで次のメロディーラインが前倒しのような感じで入ってくるというような巧妙に仕掛けがあちこちに施されているのです」～「人々はこうして曲を覚えていくんだな ～ それらのトリックは歌詞が付いて歌われると、何事も無かったかのように自然に流れていきます」。

「ドラマティック・レイン」は筒美京平・船山基紀の王道を往く豪華で揺るぎのない、かつ斬新な音作りが魅力的だったが、「夏のクラクション」は対照的で、派手さはないが、渋いという訳でもない。筒美京平のサウンド・プロダクションの多彩なヴァリエーションの中で、ここで求めたのは「シティ・ポップス」の真髄である「快適さ」と「新しさ」である。

全編に広がる奥行きと厚みのあるコーラスが印象的である。メイン・ヴォーカルとの調和も見事だ。綿密にオーバー・ダビングを重ねたコーラス・アレンジは山田秀俊。吉川忠英とホーム・メイドのキーボードを経て80年代にはアレンジャー兼スタジオ・ミュージシャンに転身。稲垣潤一の初期の多くの作品でコーラス・アレンジを担当している。大滝詠一の『A LONG VACATION』でもキーボードとコーラスに起用されている。

キーはA♭で稲垣潤一のシングル3作目でメジャー(長調)に転じた。BPMは72とスローな楽曲だが聴感上は快適なミドル・テンポで遅さは感じない。一拍のテンポの取り方と符割り(音数)の関係に着目して、BPMを落として1小節あたりの音符数を多くすることによって得られる、スローでありながら心地よいテンポを創出する80年代以降に定着した技法である。特に上記のAORの源流となっている米国のシンガーの「歌」を日本語化する技術の一環でもある。

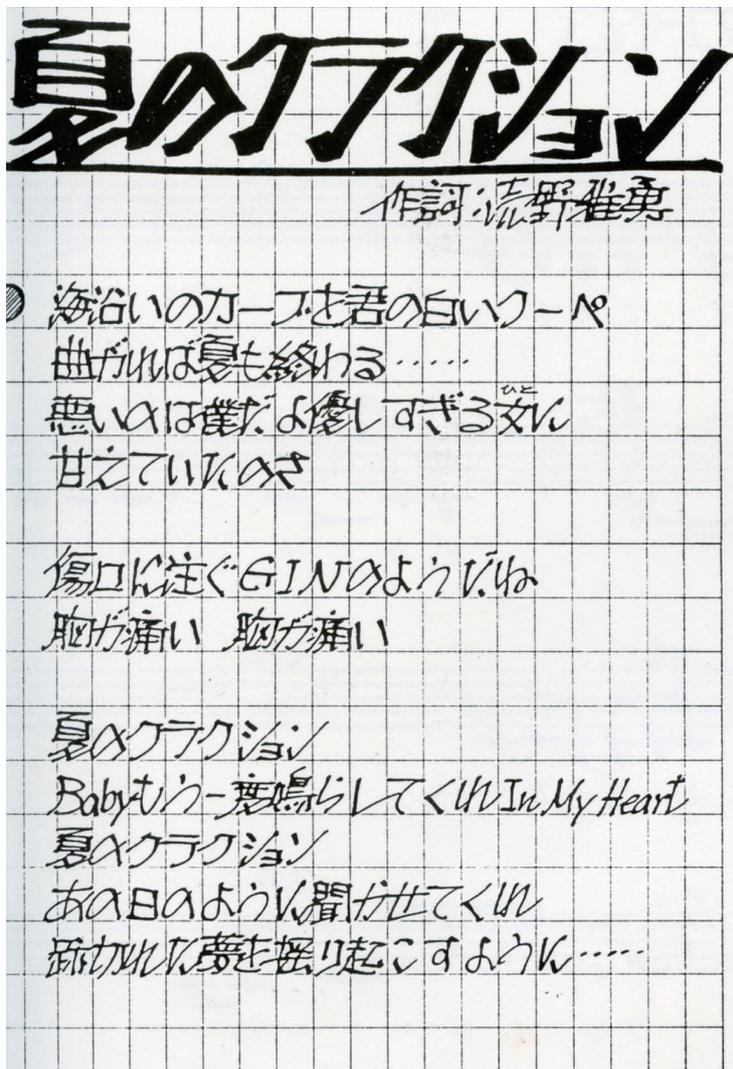


本作の「♪海沿いのカーブを」という歌い出しの1小節には三連符が3回続いて音符が10個ある。言葉の音数は9なので1小節に10音という符割りをBPMを148で捉えると早口でせわしないが、半分のBPM72に落として音符を詰め込むことでこの快適なテンポとサウンドが創出されている。Aメロはアウフタクトの連打で冒頭の「♪海沿いのカーブを」も続く「♪君の白いクーペ」も16符休符で始まっている。

レンジは下がミ♭でトップ(最高音)が高い方のラ♭で約1オクターブ半。筒美京平系列の男性シンガーとしては郷ひろみが上のファ、C-C-Bの笠浩二がシなので、それよりはやや低い実音で上のラ♭は男性歌手としてはかなりの高音である。サビの「♪夏のおおお クラクション」の「♪の」の箇所がトップで「♪のおおお」のメロディーは「♪ラ♭ミファド」でこの曲の最も特徴的な箇所のメロディー・ラインは完全に「書き譜」である。つまり歌い回しを譜面上で細かく指定している。



この歌い回しの「書き譜」という手法は、服部メロディーという表現と同じように「筒美メロディー」というものがあるとすれば、真っ先にあがる筒美京平の作曲技法のひとつの特徴である。



ある。現実にこの当時、売野雅勇は白のスーツを纏って65年型のベンツ220SEクーペに乗っていたという。

「♪夏の クラクション」というフレーズが筒美京平に導かれたとすれば、続く「♪ Baby もう一度鳴らしてくれ In My Heart」が売野雅勇の本領発揮ともいえるパートである。

シティ・ポップスの成立要因の大きなポイントが「英語譜割りの英語詞」である。それ以前のようなカタカナ表記の英語ではなく、ひとつの音符に一つのワードをあてて、かつメロディーとのスムーズな調和やイントネーションに意味も含めて成立させる作詞技法は、現時点で見れば容易にもみえるが、難易度はかなり高くこの時にはまだ一般化されていない。

16ビートや複雑な響きのテンション・コードを多用した新しい音楽を、どのように時代にマッチした日本の「歌」として表現できるか。音楽において言葉を司る「作詞家」の新たな感性が求められていた。新たな手法として「英語譜割りの英語詞」を日本語の歌詞となめらかに融合させて、かつ際だった物語を編み出すことが新たな時代を担う作詞家の大きな課題であり、テーマだった。

重要なのはメロディーやリズム、そして物語といった「歌」の核の部分の日本語の中に英語詞を自然に溶け込ませて、かつフックにする、ということである。時代を切り拓いたのは竜真知子と三浦徳子で、79年11月の松原みき「真夜中のドア」(作詞・三浦徳子／作編曲・林哲司)と同月の石川優子「クリスタル・モーニング」(作詞・三浦徳子／作編曲・小田裕一郎)が大きなエポックとなった。

「♪ Baby もう一度鳴らしてくれ In My Heart」は言葉の字面を追っても「詩」というには中庸な印象だが、メロディーとサウンドとリリックが一体化した音楽として聴いた時にはじめて稲垣潤一の声にすべてが凝縮された「歌」の世界に引き込まれる。「♪ もう聞こえない Leave Me Alone」も同様だ。これこそが筒美京平のシティ・ポップスの傑作の誕生した瞬間である。

「エスケイプ」は「ドラマティック・レイン」の後を受けてリリースされたシングル曲。作詞と編曲を井上鑑が担当。筒美京平作品のシングル作品で作詞と編曲を同一人物が手がけた楽曲は小沢健二「強い気持ち・強い愛」とピチカート・ファイヴ「恋のルール・新しいルール」を含む全4曲と数少ない。中でも編曲が単独名義なのは山下久美子「とりあえずニューヨーク」の近田春夫と「エスケイプ」の井上鑑のみである。

キーはAmで「ドラマティック・レイン」と同じ。BPMは135と数値的には高速だが、聴感上はもう少し落ち着いたように感じる。オーバーハイムOB-Xaが鳴り響くイントロが印象的で、ブリッジも同じパートで3.5小節。歌はAA'BCCという構

稲垣潤一はポルタメント(滑らかに徐々に音程を変えながら移る歌唱法)で対応。歌いこなした稲垣潤一も見事である。作詞家・作曲家がいかに優れた楽曲を制作しても、そこにビートやアクセントや歌い回しで「歌」という作品に仕上げられるために歌手の技量と能力がいかに大きく作用するかを知らされる。

もともと曲先行で制作された楽曲にこの歌詞をあてた売野雅勇の感性と作詞技法には目を見張る。旋律→歌詞→旋律というキャッチ・ボールの成せる業である。

売野雅勇と筒美京平の初仕事は野口五郎「過ぎ去れば夢は優しい」で83年5月。河合奈保子「エスカレーション」に続く「夏のクラクション」はシングル曲としては3作目となる。

82年6月の五十嵐浩晃「言葉はいらない」が作詞家デビュー作で、わずか3作目の中森明菜「少女A」(82年7月)では衝撃ともいえる新たな才能が示された。まさに新進気鋭の作詞家である。コピーライター出身という経歴そのものが新たな時代の到来を象徴している。

「夏のクラクション」は2年前の夏を回想する物語と心情を歌った男のダンディズムが豊穣な香りで描かれている。片岡義男「スローなプギにしてくれ」にみられるような、まさに80年代初頭の雰囲気漂う都市的でドラマチックな歌詞世界である。

『プールサイドに3Bとステドラーをくれ 売野雅勇の世界』(田中良明著85年1月旺文社刊)に「朝焼けの西湘バイパス。220SEクーペでは、相変わらずFENが鳴っている。今日は、グローバー・ワシントンJrのサクスが淡い朝を飾っているようだ。」という一節がある。まさに売野雅勇の描く「夏のクラクション」の世界で



成の2ハーフ。1番ではAとBの間にイントロと同じブリッジが入るが、2番ではシンセとエレキ・ギターによる別のフレーズが登場してサビの「♪ 約束は しなくていい」へ繋ぐ。「ドラマティック・レイン」同様にコード・チェンジの激しいテンションとオン・コードの連打で、オブリガードもシンセが担当。全体のサウンドをシンセ・パートがリードしている。

歌詞のテーマは「ドラマティック・レイン」を踏襲したラブ・アフェア。前

作に比べると刺激と言葉のフックが少ないのでシングル曲としては地味な印象である。2番のサビ終わりから歌い出しの「♪ ライトにきらめく あなたの横顔」へ戻る歌詞構成も含めて意外性が少ないともいえる。

「ドラマティック・レイン」は筒美京平がシティ・ポップスに積極的にアプローチしてAOR歌謡を確立した作品であり、秋元康のデビュー作にして初ヒット曲として記憶される。秋元康の著書『さらば、メルセデス』(88年マガジンハウス社刊)によれば、曲先行の数人の作詞家によるコンペティションという条件の発注で、稲垣潤一の「♪ ラララ」という仮歌入りのテープと譜面が用意されていたという。秋元康はもう一作「瞳にワイン」という異なる歌詞を用意したが「ドラマティック・レイン」が採用された。

「♪ 今夜のおまえは ふいに〜ああ都会の夜は ドラマティック」と全体を情景描写で押していくサウンドに寄り添うような歌詞である。中でもサビの「♪ 濡れて 二人は レイン もっと 強く 求めてくれ」の、音節と旋律に忠実に言葉を詰めあげていく文体は、字面で読むと平面的だが、言葉がサウンドや歌唱と一体化された時にはじめて「歌詞」として効果を発揮する。実際に聴感上、フックになるのは「♪ レイン」の部分であり、この歌詞と旋律の関係は新しい。英語詞はラストの「♪ How much I Love you」が登場するのみである。メロディーやリズムとの関係性の中で接続詞や助詞が省略されたり、言葉の順序の入り替わりが生まれるのは作詞において当然のことだが、これは少し次元が異



なる。

「♪ドラマティック ♪レイン」というのは、タイトルにもなっているこの曲の主題ともいうべきワードでありテーマである。それが何を意味するかは、作り手と聴き手の関係においては実はあまり重要ではない。ミス・リードが偶然起きることもあるし、意図的に狙う場合もある。聴き手が楽しめることが目的で、それが歌謡曲というエンタテインメントの本質かつ必然である。

楽曲の構造はかなり複雑である。イントロ10→A8→B8→A8→B'9→C8×2→D4→ブリッジ9の62小節が1コーラス。「♪ 雨の音さえ〜」がDパートになる。ブリッジ明けの2番にはAパートが登場しない。ほとんどの小節がスラーかタイで繋がっていて、かつアウフタクトが多用されている。リズムも旋律も「喰イ」と「裏」が連打されて構造はかなり複雑で、演奏難易度も歌唱難易度もきわめて高い楽曲である。



譜面にあるように「♪ドラマティック ♪レイン」はB'の最後の7～9小節の部分で、「♪レイン」は9小節目の最後の1拍の「♪ミ→ラ」という8符の旋律だが、実際にはCパートのはじまりともとれる箇所ので、音符2つに「♪レイン」とカタカナで3音入れている。イントネーションも「♪ミラ」と下がっていて言葉のハマリも普通に聴こえる。この箇所に曲の主題となる「♪ドラマティックーティック ♪レイン」をあてた秋元康の持つ新たな感性が集約されている。もう一作用意された「瞳にワイン」の歌詞は未見だが、おそらく「♪レイン」と同じ箇所に「♪ワイン」が入っていたのだろう。

掲載したのは筒美京平が作曲家生活20周年を記念して関係者向けに小部数発行した私家版の『心の窓』という書籍に掲載された秋元康の自筆の歌詞である。これをみると歌詞としては「♪ドラマティック」がB'パートの終わりで「♪レイン」が次のパラグラフの最初の言葉であることが明確である。

筒美京平は10周年の時には『ひとふし』という私家版を発行していて『ひとふし』も『こころの眺め』も楽譜集である。『こころの眺め』には作詞家による自筆の歌詞が掲載されていて興味深い内容である。「夏のクラクション」の売野雅勇の自筆の歌詞も同じ『こころの眺め』に掲載されたものである。

40周年記念に発行された『筒美京平作品楽譜集 Kyohei Tsutsumi Songbook』(2008年全音楽譜出版社刊)は、作詞家の自筆の歌詞も含めて『ひとふし』と『こころの眺め』の増補改訂版ともいえる内容で、掲載された全100曲は筒美京平の自選である。巻頭に掲載された筒美京平の直筆による「魅せられて」の全8ページにおよぶアレンジ譜は、まさに圧巻である。

テーマは不倫を思わせる。このような恋愛心理の描写はAOR歌謡の大きな傾向ともいえるべき内容であるが、発表の時点では新機軸である。80年代半ばの

バブル景気はトレンディ・ドラマの一大ブームと共に回顧されるが、そのような時代の雰囲気を感じて察知した空気が漂っている。

キーはAmでBPMは128。音域は下はミでトップは「♪ ふたりは～」の「♪リ」が上の上で「夏のクラクション」より半音高い。中心は上のミ前後で「♪ 長い髪」は「♪ ミソ(上)ファ(上)ミ(上)シ」で「♪ なが～い」は音階が1オクターブ+短3度跳ね上がる。この箇所のコードはDm7(9)→E7(#9)。どちらも5和音でE7(#9)はメジャーとマイナーのブレンドされた不思議な響きが特徴である。

演奏はこの時期はまだ打ち込みではなく生楽器だがドラムスとフュージョン風のスラップ・ベースでリズムを形成しながら、フィード・バック・ギターは装飾的な役割で旧来の4リズムという組み立てとは異なるサウンド・プロダクションである。メロディーもなくソロもない間奏はフュージョンの影響の少ないまさに時代の音である。注目はシンセサイザーで数種類使用されているようだが、前年ヴァン・ヘイレン「ジャンプ(JUMP)」の大ヒットで一躍話題を集めたオーバーハイムOB-Xaがイントロから音の彩りを決定づけている。「♪ レイン もっと強く」のヴォーカルのディレイ(原音よりやや遅れてこだまのように聞こえるエコー効果音)も新鮮な響きである。レコーディング・エンジニアは東芝スタジオの村田研治。

「ドラマティック・レイン」の最大の聴きどころである稲垣潤一のソフトで透明感のある声質は、AORの旗手クリストファー・クロスを彷彿させつつも芯のある歌い方が特徴である。ドラムスを叩きながらスタイリッシュに歌う斬新さもあり時代を賑わすヒットを記録した。2008年には中森明菜とのデュエットで稲垣潤一がセルフ・カバーしている。

筒美京平夏のクラクション関連作品

アーティスト	年月日	曲名	品番	作詞	編曲	メーカー	CHART
稲垣潤一	1982/10/21	ドラマティック・レイン	ETP-17416	秋元康	船山基紀	東芝	8
	1983/ 3/ 5	エスケイプ	ETP-17456	井上鑑	井上鑑		19
		男と女	ETP-17456	秋元康	井上鑑		25
	1983/ 7/21	夏のクラクション	ETP-17506	売野雅勇	井上鑑		井上鑑
		シーサイド・ショット	ETP-17506				

